マタイ２章 13-23 節

「クリスマスのその後」

マタイ福音書において、天使が主の御言葉を告げるのは必ずヨセフです。13節でヨセフに告げられたのは、ヘロデから幼な子イエスと母マリアを守るために、家族を連れてエジプトに避難するように、ということでした。そして19節以下には、天使が再びヨセフに夢で現れて、逃げるように告げたのです。マタイ福音書は、ヨセフの主なる神への献身を語っています。救い主イエスの誕生において、マリアの夫ヨセフの果たした役割はこのようにまことに大きいことをマタイ福音書は語っているのです。

ヨセフたちが危険の中に身を置かれるようになったのは、16節以降によります。学者たちは、ヘロデに報告するように言われていましたが、報告せずに帰ってしまいました。そのため怒り狂ったヘロデは、ベツレヘム周辺にいた幼い男の子たちの虐殺を命じます。この出来事は、決して他人ごとではありません。私たちはヘロデと同じなのです。その決定的な点、それは「罪」です。ヘロデの罪。それは、神さまをさしおいて自分が神のようになること、これが罪です。私たちも、自分の周辺で、常に王であろうとしてしまいます。自分の領域を脅かす存在がいると不安になってしまう。すると、私たちはその人や意見を拒絶します。この時のヘロデと私たちの心は、何ら変わらないのです。神をさしおいて自分が王になろうとすること、それが聖書の語る人間の罪です。そしてその罪から、拒絶が生まれ、暴力が生まれ、苦しみが生まれるのです。その罪の結果、二歳以下の赤ちゃんが犠牲になってしまう。そのような罪の結果の現れが、この幼児殺害なのです。結果として、イエスさまは、ヘロデによって殺されることはありませんでした。しかし大人になったイエスさまは、神の子として、正しい方で、罪なき方だったのに、最後は人々の拒絶によって、十字架に架けられて殺されてしまいます。私たちは、イエスさまが私の真の王であると、受け止めることができるでしょうか。

この幼児虐殺は、エレミヤの預言の実現だったとマタイ福音書は語っています。18節は、エレミヤ書31章15節の引用です。旧約の預言が実現した。しかし神さまはそれで終わらせず、希望の言葉もエレミヤに託しました。「主はこう言われる。泣きやむがよい。目から涙をぬぐいなさい。あなたの苦しみは報いられる、と主は言われる（エレミヤ書31章16節）」。連れ去られた息子たちは敵の国から帰って来る、だからあなたの未来には希望がある、と告げておられるのです。どうしようもない時でも、主なる神さまの救いと希望がある、そのことを伝えているのです。

神さまはそれぞれの人に、またそれぞれの家族に、使命を与え、住む場所も時も定めておられるのです。神さまは私たちのために、様々な手を尽くしてくださる方です。新しい主の年2025年。神さまの御手、導きの御手、守りの御手にゆだねて歩んでいきたいと思います。どうか、主がヨセフ家族を守ってくださったように、私たち横浜本牧教会の家族が新しい年も、神さまのお守りの中過ごしていけるようにと願います。